

書籍紹介



『最新獣医寄生虫学・寄生虫病学』

石井俊雄 著

今井壯一 編

最新 獣医寄生虫学・寄生虫病学 編集委員会 編

2019年4月 講談社 発行

定価 (本体 12,000 円+税)

浅川満彦 (酪農学園大学獣医学群)

この書籍の原本は日本獣医生命科学大学獣医学部の故・石井俊雄教授が、1998年に刊行し、その後(2007年)、同大の故・今井壯一教授が改訂された『獣医寄生虫学・寄生虫病学』である。したがって、皆さんの中にも、この本を使って寄生虫学の授業を受けた方がいらっしゃるかも知れない。ただし、原本は総論・原虫編と蠕虫他編に分かれ、それぞれハードカバーで装丁されたものであった。しかし、今回の改定で1冊にまとめられ、表紙もソフトカバーになった。また、原本で欠落していた外部寄生性節足動物を補完し、他のパートも最新情報(疫学、病態・診断、治療、予防など)を盛り込み一新された。この情報の選択・追加のため、同大・池和憲教授が他獣医大学や国立感染症研究所・民間企業に所属する教員・研究者に呼びかけ編集委員会を立ち上げた。このメンバーに野生動物医学関係者も含まれていたことから、野生種、動物園水族館飼育種、愛玩鳥あるいはエキゾチックペットなどを宿主とする寄生虫とそれらによる疾病の記録が、各論で反映される結果となった。したがって、このような動物を診療対象にする獣医師やコアカリ教科書に不満を抱く野心的学生には最適資料となっている。以下でその一部を抜粋、紹介したい。

原虫: 原虫では、まず、コクシジウムや住血胞子虫などのアピコンプレックス類が充実しており、ウサギやモルモットの *Eimeria* 属、タヌキの *Sarcocystis miescheriana* (実験感染)、各種齧歯類の *Besnoitia* 属、哺乳類以外の脊椎動物まで網羅した *Cryptosporidium* 属、サル・ゴリラなどの *Plasmodium* 属・*Hepaticystis* 属、爬虫類の *Haemogregarina* 属などの項で展開された記述は診断・診療や保有状況調査などで有益であろう。ただし、以下も含め該当するが、事細かな画像や記載までは本書に含まれないので、必要ならば学名を辿って文献渉猟する。幸い、今日はこういった検索が非常に容易な環境になっているので、見つけること自体、それほど支障は無かる。だが、日本語で記されていないことので、学生は覚悟を決め自習を遂行して欲しい。次いで、鞭毛虫類 (*Pentatrichomonas* 属, *Monocercomonas* 属,

Spironucleus 属および *Giardia* 属) やアメーバ類・繊毛虫類の記述にも、非典型的な宿主動物の健康を守るためのヒントが隠されているので丁寧に読み込みたい。

蠕虫: 蠕虫の各論には、吸虫、条虫、線虫、そして、コアカリ教科書では姿を消した鉤頭虫と舌虫が登場する。誤解をしないで欲しいが、浅川はコアカリ批判論者ではない。今日の日本で就業する新規獣医師が、大部分の職域で必須な必要最低限の項目を選定する崇高な作業の果実がコアカリである。したがって、時間と場所、対象動物によってはコアカリの内容だけで太刀打ちできないことは理解してもらいたい。特に、学生がコアカリだけで寄生虫病は何とかなると思っはいてはいないと思うのだが、それでも、彼らの身近に本書のような網羅的なものがないと、初学者がその広大で多様な世界を想像するのは難しい。ついでに話すと、魚病のコアカリ教科書では鉤頭虫(症)は含まれてしまうので、混乱させないための丁寧な説明が必須であろう(なぜ、寄生虫病の「本丸」科目で学ばず、ここで学ぶのだろうかという疑念への回答)。なお、(コアカリ対象外の)舌虫は魚病学で学ぶイカリムシやチョウに近い甲殻類の仲間なので、この点も本書で解説したい。

吸虫: 吸虫ではアラリア *Alaria alata* が示されていたことに(前向きに)驚かされた。この種は北海道でキツネを解剖していれば普通に検出されるが全国区ではない。しかし、壺形吸虫の形態を説明する際のモデルになるし(退化した吸盤)、吸虫総論ではメソセルカリア形成という現象解説でも活用可能な種である(それに、欧米では新興的なヒトと動物の共通感染症の病原体としてみ見なされているし)。浅田棘口吸虫はコアカリ項目だが、野生動物にはこれ以外の近縁種が実に多い。本書でもそのすべてを解説する余裕は無いが、その一端が理解できるような記述である。

ウエステルマン肺吸虫の待機宿主については、本書内随所で用いられる背景色を違えた「コラム」の1つとして説明されているが、その中に、とびっきりの新鮮情報があった。すなわち、この吸虫の待機宿主の1つとして、ニホンジカが含まれるという点である(p158右欄)。このコラムでは直接的な明記はなされていないが、要するに、シカが(メタセルカリアを包含する)サワガニ(などの第2中間宿主)摂食の可能性を示した初の成書である。この記述をシカの食性を研究する生態学者が注目し、寄生虫学と動物生態学との実りある共同研究の端緒になることを願う。

ある寄生虫(例:吸虫)を宿主として、その体内にある病原体(例:細菌)が寄生する現象を超寄生という。この話をすると、学生や一般市民には面白がってもらえるが、病原体別蛭壺状態に

なっている現行の研究体制では鬼門である。このような事例の1つがサケ中毒吸虫 *Nanophyetus salmincola* とネオリケッチアで、本書でも明示されていた。この吸虫の終宿主は野生イヌ科動物なので、野生動物医学領域でも無視できない。

鶏卵吸虫もコアカリ教科書から姿を消して久しいが、野外飼育されるニワトリ（いわゆる地鶏）はもちろん、野鳥検査でも遭遇する可能性のあるグループである。すなわち、鶏卵吸虫とは単一種を示すのではなく（恥ずかしくも初めて知った）、*Prosthogonimus* 属の種群総称であるという。

条虫：日本海裂頭条虫の終宿主の1つにヒグマが見られたが（p176 左欄）、もし、これが日本（北海道）であるならば、現在、日本野生動物医学会誌に旭川医科大学の研究者が筆頭となり投稿中であるので、その原著刊行を期待して欲しい。コアカリでは扱われない *Mesocestoides* 属の記述も豊富で、この終宿主タヌキ、第二中間宿主ヘビ・野鳥の診療する際は有益である。さらに、鳥類臨床では「家禽の条虫類」（p200 以降）で列挙される属種も参照されたい。

線虫：本学会員の皆さんに関わる線虫症として、アライグマ回虫症など *Baylisascaris* 属各種による疾病やハムスター・ウサギの蟯虫症、サル腸結節虫症などは重要である。この他の検出記録として、ヒグマのマレー鉤虫 *Ancylostoma malayanum*、食虫類の *Crenosoma* 属肺虫、哺乳類（ヒト含む）寄生の開嘴虫 *Mammomonogamus* 属、ニホンザルの糞線虫 *Strongyloides fuelleborni* などは、日本で野生動物を扱う場合、遭遇する可能性は極めて高い。



なお、線虫と舌虫の両章には浅川が関わった元ゼミ生や共同研究者（本学会前会長・村田浩一 日本大学教授と同会員・金城輝雄沖縄こどもの国獣医師を含む）と一緒に公表した論文で使用させて頂いた写真が転載されている（本書 piii の序文でもお名前は列挙）。いずれも迫力ある病変写真で、この学会の卓越した底力を示した証左である。これらは皆さんご自身で確かめて欲しい。このように学会員各位がお持ちの情報は宝なのである。したがって、まず、論文として公表をして欲しい。そうすれば、本書のような教科書に転載され、未来への遺産となる可能性が生ずる。このことを見事に実証した点でも、本書の刊行は銘記すべきである。